



生誕180周年

NHK 大河ドラマ「青天を衝け」放送記念

「時代の変革者 渋沢栄一の半生」

第2回：深谷編（中）

ぶぎん地域経済研究所 取締役 研究主幹 松本 博之
(公益財団法人 渋沢栄一記念財団維持会員)

4 藍玉づくりと渋沢家

前回でも触れたが、栄一の生家では、藍玉を盛んに作っていた。父、市郎右衛門は一代で藍玉製造販売を大成功させ、村内で「東ノ家に次ぐ資産家となり、家運再興を成し得た。市郎右衛門は自ら藍葉を作るだけでなく、他の農家から藍葉を買い取り、これを藍玉にし、紺屋に売り渡していた。彼は、商売熱心であると同時に研究熱心で、藍の品質改良にも心血を注いでいた。

さて藍玉の元になる藍の日本における歴史は奈良時代まで遡ると言われている。江戸時代に入ると木綿の普及に伴って、幅広く藍染めが使われるようになった。中でも四国・阿波(徳島県)産の藍の染料(すくも)が日本で一番品質が良いとされた。全国ブランドとして海運にて阿波から直接、藍玉が江戸に届くことから珍重された。そのため江戸やその周辺では大名家や豪商などは高級品の阿波藍を買い求めたという。

一方で、江戸近郊の農家でも藍を作るようになり、そうした家々が特に大衆向けの藍の需要を満たしていったものとされる。血洗島村周辺では「武州藍」

として藍の葉が盛んに栽培されていた。販売先は上州(群馬県)、信州(長野県)、そして武蔵(埼玉県内)では秩父方面の紺屋、染物店であった。江戸ではない地域を市場として選び、大衆向けに販売網を広げていった。

また渋沢家同志での競合をさけるため得意先地域を分けていき、「中ノ家」では、信州をメインの得意先としていた。

後年、栄一は、「父は、去年より今年、今年より来年というふうに、年毎に良い藍玉を作ることを楽しみにしていた。藍を栽培する農家からも評判が良かった。」また「市郎右衛門さんは質の良い藍でないと買ってくれないから、今年は市郎右衛門に褒めてもらって、買ってもらう。と農家が競ってくれて、父は年々、質の高い藍を仕入れることができるようになっていった。」と振り返っている。

市郎右衛門は、今で言えば創意工夫型の“企業人”でもあった。信頼による長期的利益の方が、財産を大きくすると考える近代的な発想のできる人だった。

5 家業「藍玉」で“年商10億円”

血洗島村などの利根川沿いの地域は、藍の栽培に適した土地であった。人糞、馬糞、堆肥だけでな

く、良質な藍を育てるために欠くことが出来ない肥料としての大量の干鰯が必要とされたが、血洗島村では、当時上総の九十九里浜で生産されていた干鰯を水郷経由で利根川を利用して近隣の中瀬河岸まで運ばれ、比較的容易に入手ができた。これが栄一の実家「中ノ家」の富の源泉である藍玉製造をより一層隆盛にするものでもあった。

では「中ノ家」ではどれくらいの収入があったのだろうか。藍玉製造・販売で売り上げが年間1万両にのぼっていたと推計されている。

取引先は信州だけで50軒の紺屋があった。1軒あたり年間売上が平均100両、他の上州や秩父での売上を含めると年商1万両を超えていた。利益

は売上の15～25%の利益率とされているので、藍玉の取引だけで、年間1,500両から2,500両という利益を上げていたということになる。

新井慎一①によると、その後、栄一は江戸に出て、下谷練塀小路の塾に寄宿しながら、漢学を学ぶのだが、この寄宿料が朝夕の二食付きで月に1両であった。現在の貨幣価値で10万円とすると1万両は、現在の10億円に相当するものと推定できるとしている。栄一の家、「中ノ家」は、藍玉だけで、年商10億円、利益が年間1.5～2.5億円という勘定になる。映画やテレビ番組の時代劇に出てくる農民像とは、かけ離れた桁違いの財産を持った新しいタイプの“農民”であったと言っても良いだろう。

■藍玉づくりとは

さて暫時一服、ここで藍玉作りの手順について、紹介しておきたい。

まず春に種を撒き、6月頃になると50～60cmほどの丈になってくる。初夏になると藍の収穫が始まる。一番藍、二番藍と刈りとって葉をむしって、乾燥させて小さく刻む。藍を納屋にむしろを敷き、葉に水をかけて高く積み重ね、上からむしろをかぶせ寝かせる。

この「藍を寝かす」という作業は、作業工程が難しく、手間がかかるので、普通の農家ではやらない。2～3か月ほど「寝かす」間に、その日の天気や気温を見ながら、かける水加減を調整し、攪拌したりする、むしろの厚みをいろいろと変えなければならぬ。この作業によって発酵作用が進み、熱が出てくる。手間がかかるが、上手くに「寝かせる」と藍の色がよく染まるようになり、値

段も高く売れることから、気が抜けない作業となる。藍染めの染料となる「糞」が完成する。^{すくも}「糞」を土中に埋められた藍甕などに水、石灰などを入れて30℃くらいに保ち、染頃になると上部に泡が盛り上がり、染時を知らせる。この染め液を作る一連の工程を「藍建て」という。この染め液の水分を飛ばして固形し、直径6寸ほどの団子にしたものが藍玉であった。11月頃に出来上がった藍玉を信州や上州の紺屋へと売り歩いた。

商業という視点から藍玉作りを見ると、まず原料の藍葉を大量に買入れるために、一時的に大量の資金を必要とする。仕入れは現金、その支出は収穫時に集中することになる。時期を外せば、原料を仕入れることはできない。次に藍葉を発酵させて、丸く突き固めて藍玉を作っていくためには3か月かかり、この間には、人手が必要なる。

藍玉の製造が終わって、それを紺屋に売り渡しても、直ちに現金が手に入るのではなく、紺屋が藍玉を使って、得意先の依頼に応じて染物を作って、利潤をあげてからとなる。春と秋に紺屋の様子を見に行き、紺屋から受け取る売上は、年に2回で、全てが掛売となっていた。正月と盆は掛け取りに行く。このためその運転資金の保有については、細心の注意が必要だった。

藍の販売については、現代にも通じるビジネスセンスが求められていた。常に頭の中に入れて置かなければならない商業的採算と藍の善し悪しを見分け、高品質を保つためのモノを見る目も必要とされた。その上に販売先の管理などが必要とされた。藍を栽培する農家は多かったが、誰もが藍玉を製造、販売できる事業というものではなかった。それだけに、成功すれば利潤も莫大なものとなっていた。

6 14歳、天性のビジネスセンスを発揮

栄一はというと、14～15歳までは、読書、剣術、習字等の稽古事で、ほとんど家業を手伝うということとはしないで毎日を過ごしていた。しかしながら、家業に厳格な父から、「14～15歳になったのだから、今後は農業・商売に心を入れなさい。ある程度の時間を割いて、家の仕事をしなさい。いくら読書が好きでも、学者になるわけではないのだから、一通りに文章の意味がわかれば十分なのだ。本人としては、まだまだ不十分だろうが、いつでも学べるのだから、昼夜の読書三昧は困る。農業、商売にも努力をしてくれないと、家がなりたない。」と言われ、その後、血洗島村を離れるまで手伝うことになる。

17～18歳ころには信州や上州の得意先回りは栄一が中心となっていた。

この家業、藍玉製造・販売との係わりについては、1853（嘉永6）年、14歳の時に父に代わって祖父と一緒に取引先を回った時のエピソードが残っている。栄一の利発さ、機転の良さを象徴した話として語り継がれている。ここで紹介したい。

この年は関東地方の日照り続きによって、一番藍は不作となっていたが、二番藍は作がよかった。父が信州、上州方面の得意先の紺屋巡りの時期と重なってしまったため、二番藍を求めて栄一は祖父となる岡右衛門と一緒に秩父方面へ行くことになった。父、市郎右衛門は、「今年は二番藍を出来るだけ多く買い入れたい（一番藍が不作のため）が、栄一の商売修行の意味もあって、二人で買い入れに行ってくれませんか？」と岡右衛門に言い、（栄一には）「祖父さんにお供して実際の駆け引きを見習ってきなさい。」と言って、得意先回りに出かけていったのである。

しかしながら、栄一としては、「年老いた祖父さんのお供なんて気乗りがしない。まだ若い、自分としては藍の良し悪しは分かっている。一人で買ってみよう」と生意気にもそう考えていた。

最初の日、祖父と一緒に12軒の農家で買い付けを行った。父は藍の鑑定家としても評判が高かったため、栄一と一緒に歩くのは嫌でなかった。しかしながら、隠居した耄碌しかけた祖父と一緒に歩くのは、気乗りがしなかった。そこで一計を案じるのである。翌日、祖父に「私一人で行きたいと思えます。」と言った。祖父は怪訝な顔をして、「お前が一人で行っても仕方ないだろう」と言ったが、「とにかく、一人で行って、見て帰りたいので、是非、お願いします」と続けていうと、祖父も納得して、いくらのお金を持たせてくれた。金子を桐巻きに入れて、横瀬村～新野村方面へ行き、藍を買いに来たと言って農家を回ったのである。自分自身では一人前のつもりであったが、見る限り明らかに子どもである。栄一のなりを見て、「なんだ、まだ子供じゃないか」ということで、軽蔑して、少しも信用してくれなかった。ただし、栄一は、門前の小僧として父の対応を見て知っていたので、子供だということ、相手にしてくれないことも構わず、「これは肥料が足りないそうさ」、「乾燥が十分できていない」など鑑定のまね事みたいに、批評を下していった。村人たちは、「妙な子どもが来ている」として評判になった。

そして最後には「市郎右衛門さんのとこの倅とあって鑑定が上手だ」ということになって、新野村で20数軒から藍を買い入れることができた。翌日は横瀬村や宮戸村、翌々日には、大塚島村や内ヶ島村などを回って、好結果をえた。その年の二番藍のほとんどを栄一が仕入れてきた。その後、上州から戻ってきた父は、彼の買い入れた藍を見て、大いに褒めた。これが栄一の独り立ちでの商売の最初と

なった。自身の回顧録に詳細に書かれている。

また栄一は、「質の高い藍を作りたい。阿波の藍に負けないものを作りたい」と努力をしていたと言われている。そのために彼が採ったある奇策がエピソードとして残っている。

1862（文久2）年、栄一22歳の時、相撲の番付の形で、質の高い藍を栽培した農家を大関、関脇、小結と「武州自慢鑑藍玉力競」なるものを作ったのである。行司役は栄一本人になった。各栽培農家は大関に選ばれることを名誉として、大関を目指して藍作りを競い合ったとの話である。

父の意に従って、家業に精を出した栄一は、藍の商売をほぼ引き受けて、年4回ずつ、信州、上州、秩父方面を回った。栄一は商売の旅に尾高惇忠やその弟、長七郎とよく出かけた。三人は互いに漢詩や漢文の紀行を書いて、楽しく旅をしていた。そして24歳で血洗島村を離れるまで、栄一は惇忠らと尊王攘夷（倒幕）運動に走りながらも、家業にも懸命に取り組んでいく。

7 人生の師、尾高惇忠

次に栄一の幼少期から青年期に最も影響を与えた、栄一の“人生の師”尾高惇忠と彼の独特な指導法について紹介する。尾高惇忠（以下、惇忠）は、栄一より10歳年上の従兄弟になる。また後に、栄一は惇忠の妹・千代を最初の妻として娶ることになる。

栄一は、惇忠をどのように評価していたのか。“藍香ありて青淵あり”、[※]「今日の自分があるのは、ひとえに惇忠の教えのおかげである」と栄一に言わしめた師匠の惇忠は、幼いころから学問好きで知られており、そのうえに頭が良く、立派な先生として尊敬されていた人だった。17歳の頃から幕末まで自宅において私塾「尾高塾」を開いて近郷近在の子弟た



藍玉通（渋沢史料館所蔵）

ちに学問を教えていた。誤解しないように加えておくが、惇忠は“田舎の学問好きな兄ちゃん”にあらず、ひとかどの漢学者と言ってよいレベルの学問を身に着けていた。

栄一は6歳の頃から、父、市郎右衛門に漢文の読み方を習い、7～8歳になると尾高塾へ習うようになった。栄一の家から7～8町離れた下手計村にある尾高塾まで歩いて通い、3～4時間ほど勉強して帰ってくるというのが日課となった。

独特の指導法による読書術

惇忠の読書の教え方が変わっていたことを栄一は語っている。通常、学校の授業でやるように、丁寧に繰り返し読んで内容を暗記させるようなものではなかった。初めの頃は、一字一句を暗記させるのではなく、むしろたくさんの書物を通読させて、自然と読書力をつけさせ、読書への興味を醸成させた。自然と読解力を磨かせ、「ここはこんな意味」「ここはこういう解釈」と、本人が思い至るのに任せるといったものだった。栄一は、「ただ読むばかりで4～5年経過し、ようやく11～12歳になる頃から少しずつ読書の面白味がわかってきました。」と語っている。

その上、惇忠は「読書の読解力をつけるのは、読み易いもの、興味があるものから入るのが一番良い。どうせ四書五経を丁寧に読んでも、年を取って、社

※「藍香」は惇忠、「青淵」は栄一の雅号



尾高惇忠（渋沢史料館所蔵）

会でいろいろ経験してからでないと、自分のものにならない。今の年齢では、何でも面白いと思ったものを集中して読めばよい。漫然と読むのではなく、心を込めて読んでいけば、知らないうちに読書力がついて、「日本外史」、「史記」でも難しい文書もだんだん面白くなってくる。好きなものをどんどん読みなさい」という指導法もとっていた。

栄一も年少の頃は、堅い書物は内容がよくわからないということで、通俗三国志や里見八犬伝とか、戦記ものや小説の分野、誰が読んでも面白いと感じるものを、好んで読んでいた。

このような惇忠の指導した読書法が奏功したのか、栄一は無類の書物好きとなり、片時も本を手放さない生活を送るようになった。12歳の正月、年始の挨拶回りに家族と出かけた時に、好きな本を歩きながら読んでいたところ、夢中になり過ぎて、溝に落ちてしまった。正月の晴れ着を台無しにして母親に大変叱られた。という話を思い出と語るほど読書好きだった。田舎のために、読みたい本も希望通り手に入れることもできないので、親戚や知人の蔵書を借りては、片っ端から読んでいったのである。

水戸学を学び、尊王攘夷思想・倒幕へ

惇忠は、当時の最新流行の学問となっていた水戸学（後期水戸学）の思想にも力が入っていた。

時代背景を見てみると、1854（安政元）年、ペリーが再び浦賀に来航し、幕府は下田、函館二港を開港。その後にイギリス、ロシアやアメリカと和親条約を結ぶ。これに反対する鎖国論者は、強い攘夷論者であった孝明天皇を動かして対抗していった。尊皇攘夷思想がその後に幕府の弱腰外交から倒幕へと結びついていった。

そこで栄一はというと、水戸学に傾倒していた師匠の惇忠に多大な影響を受けていく。水戸学の藤田東湖などの考えから、幕府の開港を痛烈批判、「国を鎖さなければならない。夷狄は攘わなければならない。和親条約を結ぶのは汚辱である。開国を許した幕吏は国賊で、鎖国を主張した水戸派は神州の精華を発揮した忠臣だ。」栄一は惇忠から、このような思想的な洗礼を受けた。

このことが、その後の栄一、惇忠の人生を大きく左右することになっていくのである。後年、栄一は、「この当時、尾高先生が国家を憂い、世情をなげく熱烈な気魄がなければ、私も安然として血洗島の一農夫として一生を送ったであろう。渋沢が今日の地位に到ったには、全く翁（惇忠）が水戸学問に感化された余波である。」と言っている。

例外だった栄一の学問はじめ

栄一が幼少期から青年期に受けた惇忠からの教育を考えると、内容が非常に高度なレベルであり、まして農民であったことを考えると全く例外と言ってよいものであった。これについては、鹿島茂②、宮本又郎③は表現が違えども、同様な指摘をしている。鹿島は「尾高惇忠に学問を習ったということは、金持ちの家が子供のために家庭教師を雇ったというレベルのものではないことを理解しなければならない。」と言い、宮本又郎も「現代のお坊ちゃまに家庭教師をつけるということとは、次元が違うという

こと」と言っている。

加えて鹿島は「当時の常識からすれば、名主見習いとはいえ、農民に過ぎない栄一の父が自ら漢籍に親しみ、子供にもその手ほどきをすること自体がかなり例外的なことである。また近くにいた従兄弟が論語や中庸、大学まで修めたインテリで、栄一の家教師になってくれることも、まず有り得ないことだと考えてもよい。栄一の幼いころの教育は、当時の当たり前ではなかったということだ。」と言い切っており、宮本又郎も「当時として、農村居住者の少年がこのよう教育を受けたのは稀であったろう。」と分析している。

波乱万丈、惇忠のその後

その後の惇忠はどのような人生を送っていたのであろうか。彼は、その中心人物として彰義隊の結成に加わった。その後、彰義隊と袂を分かち振武軍を組織し飯能戦争で政府軍と戦い敗北、函館へのがれ榎本武揚や土方歳三とともに五稜郭で函館戦争にも参加している。

明治時代に入り、惇忠は、栄一が明治政府や実業界で力をつけるとともに重用され、官営富岡製糸工場の初代工場長や第一国立銀行の盛岡、仙台支店支配人などを務めている。1901（明治34）年の正月、70年の生涯を閉じる。

栄一は、人生の師に対して、「学ありて行いあり君子の器、われまた誰かを頼らん、何ぞわれを捨てて逝けるや」と惇忠の墓碑に刻んでいる。

- 参考 ①新井慎一「若き日の渋沢栄一」
②鹿島茂「論語と算盤」算盤編
③宮本又郎「日本近代の扉を開いた財界リーダー」

FUKAYA
NATIVE



深谷の街なかで50年以上営業を続けているカフェ花見は、市民の憩いの場として馴染みのある喫茶店である。ちょっと変わった渋沢栄一に会うことができる。“栄一カフェオレ”だ。パリへ行く途中に船上で飲んだコーヒーにすっかり魅了された栄一、こうやって皆さんに飲まれるのも悪い気はしないであろう。

2015年より若女将岡村淳代さんの発案で始めた一品ながら、当初は深谷市のゆるキャラのふっかちゃん



栄一カフェオレ

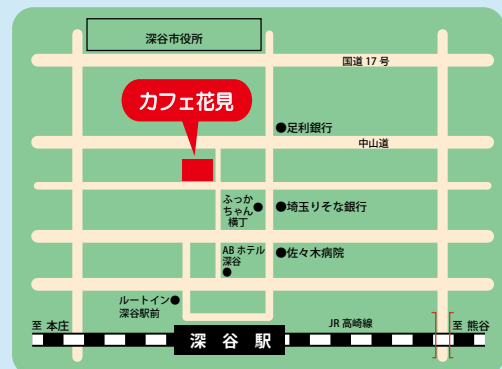


コーヒーに押され気味だったが、ここへ来て人気上昇中。来年はさらなる注文増に期待をしている。また幕末のイケメン男と言われた、栄一の従兄弟、渋沢平九郎カフェオレと一緒に賞味できる。

若女将の岡村さん

☎ 048-571-0528

住所：深谷市仲町2-7
営業時間：10:00～19:00
定休日：水曜日



深谷駅北口より徒歩5分